



2.24

森の朝が好き

一九九四年六月三〇日 第一刷発行

著者——俵 萌子

装幀——川上成夫

装画——俵 萌子

発行者——大和謙二

発行所——大和書房

東京都文京区関口一—三三—四

電話——〇三(三三二〇三)四五一一

振替——〇〇一六〇—九—六四二二七

印刷所——暁印刷

製本所——ナシヨナル製本

乱丁本・落丁本はお取替え致します

©1994, Moeko Tawara, Printing in Japan

ISBN4-479-01080-7 C0095

俵 萌子(たわら・もえこ)

1930年(昭和5)12月、大阪市生まれ。大阪外国語大学フランス語学科卒業後、サンケイ新聞社へ入社。主に育児・教育記事を担当する。

1965年、退社。女性・家庭・教育問題等、評論家として幅広く活躍している。1981年より4年間、日本初の準公選で、東京都中野区教育委員を勤める。赤城山中に夢工房・陶芸教室主宰。

主な著書

『四十代の幸福』『今日がいちばん若い』『五十代の幸福』『思春期の子を持つ親の本』『人生に定年はない』(いずれも海竜社)、『こんな家に住みたい』(ファラオ企画)、『宙ぶらりんの娘たちへ』(東京書籍)など多数。

俵 萌子 *tawara moeko*

森の朝が 好き



森の朝が好き／目次

一、私の職業は、猫のドアマン

7

二、本宅の老妻、別宅のギヤル

21

三、たった一人の紅白歌合戦

35

四、天国の父の最初のいたずら

59

五、孤独の数だけ猫がふえる

79

六、ある日、外人がやってきた

97

七、大きな森の小さな家 113

八、天国の父の二度目のいたずら 133

九、「老妻」たちの猛反撃 151

十、森の家族の祝祭日 173

十一、ふたたびもとの静寂へ 195

一、私の職業は、猫のドアマン

寢室を出ると、いつものように非常ベルと庭園灯のスイッチを切る。居間にはいる。

外は、まだ薄暗い。冬至を二日過ぎたばかりだ。こんどの天皇は、妙な日にお生まれになった。おかげで最近、冬至と祭日とクリスマスが連結する。

私には、クリスマスは関係がない。娘から、孫へのプレゼントを強要される日、とでもいおうか。天皇誕生日も、関係がない。いや、こっちは、かえって迷惑なくらいだ。暮れのいちばん忙しい時、お手伝いの人がいっせいに休んでしまうからだ。うれしいのは、冬至だけである。秋以降、ひたすらこの日を待ちわびていたような気がする。

「きょうから、髪の毛一本ずつ、日が伸びていくのよ」

毎年、口癖のように、同じ言葉を繰り返す。

日の長短が私の重大関心事になったのは、群馬県、赤城山中に山小屋を持つようになってからだ。十年ほどになる。子育てまっ最中のころ、私には、外が暗いか、明るいかなんて、まるで関心がなかった。

居間の電気をつけながら、

「お早う。みいよん！」

「お早う。夢よん！」

できるだけ、大声を出す。独り暮らしの家では、自分が声を出さない限り、家中で人声をきくことがない。

みい子も、夢も、知らん顔。

ことし十五歳。三毛猫の「みい子」は、食卓の足の下で寝ている。十三歳。白猫の「夢」は、指定席の椅子の上。年をとって、二人とも可愛げが無くなった。昔は、私が起きていくと、尻尾をたてて（夢は挨拶の声を出しながら）、私にすり寄ってきたものだ。

まっ先に、食堂、居間に接続したサンルームのガラス戸を開ける。猫のトイレ外出のためだ。薄目を開けて、私の動作を見ていた夢が、指定席の椅子から降りてくる。大きく伸びをする。開けたガラス戸に向かって、よたよた歩きはじめる。彼女の腰痛は、最近、ますますひどくなった。ストレッチ体操である伸びをしないと、すぐには歩けないのだろう。

瘦せた体に腰骨が突き出し、短い尻尾のつけ根の少し上には、直径三センチ大の禿^{はげ}がある。主治医のY先生によると、この禿はノミアレルギーだそうだ。禿の下から、薄ピンクの肌がのぞいている。もともと短毛の彼女は、老いてますます毛が少

なくなった。その上、禿となると、さながら毛をむしられたいなば因幡の白兔だ。

「それでも、昔、四、五歳のころ、夢だつてふつくらして、綺麗な時期があつたわよね」

最近の夢を、醜いと思つてゐる私の心を見透したか、秘書兼マネージャーの姉は、きのう、釘をさすように私にいった。

それは、そうだ。夢にだつて、ほんの束の間だつたけれど、綺麗な時期があつた。年をとると、だれだつて穢きたなくなる。私も、穢きたなくなった。だから、夢のことはいいない。そう思つてゐるのに、なぜかときどき、私は大声で叫び出したくなる。

「なんて、みすばらしい猫だろう！」

「なんて、穢きたならしい猫なんだろう！」

これは、いったい、どういう心理なのだろう。

ゆうべの猫の食器の片づけをする。まず、夢の食事場所へ行つてみる。最近、夢は、腰痛で、腰をおろせない。夢の食事だけは、台の上に乗せてある。立つたまま（というか、四つんばいのまま）食べられるよう、姉が配慮したものだ。

台の横に、今朝もまた、ゲロが吐いてある。この猫は、若い時から、よく吐く猫だが、最近はとくにひどくなつた。今朝のゲロは、まだありがたい。サンルームの

ビニルタイルの上だからだ。クリネックスを重ねてつまみとり、トイレに持って行って流す。あとを雑巾で拭けば、痕跡は残らない。

これが食卓の下ホットカーペットの上だと、まことに困る。バアさん猫のために、ホットカーペットは、真夏を除いて一晩じゅうつけ放しにしてある。寒さが応えるだろうと思うからだ。その上にゲロを吐かれると、私が起きてくる時間には、ゲロが乾燥し、こびりつき、雑巾で拭いたって、ちっとやそつとはとれない。

ゲロのついでに、夢のおしっこ始末もする。こちらは説明しないとわかってもらえない。夢のトイレは、アメリカ製の立派なのが買っている。ふたつきで、砂が外へはみ出さないタイプだ。最近、夢は、その中で糞尿をしなくなった。全部、外へこぼす。姉は、腰痛のためだという。

そこで、トイレのまわりにたくさん新聞紙を敷き、夢は、新聞の上で、腰を曲げずに用を足す。朝一番の私の仕事は、その糞尿の始末をすることである。糞尿といっても、糞はたいいてい戸外でするから、ほとんどは尿の始末だ。

尿のしみ込んだ新聞紙を丸め、東京都指定のゴミ袋に入れ、ゴミ捨て場を持っていく。これが毎朝バカにならないポリウムである。

さて、食事は？

食べた分量を、九時に出勤してくる姉と、もう一人のアシスタントに伝えなくてはならない。削りがつおは、食べている。ドライは半分。とりのさき身と黒缶のまぐろは、ほとんど残っている。

夢の皿を集め、流しへ。ついで、みい子の食事場所を見る。

「二人は、別々のところで食べたいのよ。だから、一緒にはしないでね」

いつも、姉から嚴重に、申し渡されている。みい子の食事場所は、台所の流しの前だ。みい子も、残している。皿は三枚。そのうちの二皿は空になっていた。黒缶のまぐろは大量に残っている。いったんは、残った猫缶を丸ごと捨てようと思った。姉が、いつも私にいうからだ。

「猫は、残り物は食べないのよ。けちけちしないで捨てなさい。そして、新しいのを入れてやるのよ」

しかし、今朝は「そうだろうか」と思った。

人間の私は、いやでも残り物を食べている。我慢して、毎日食べている。なのに、猫は残り物を食べない。いったいそんなことが許されていいのか。人間が残り物を食べるのなら、猫も残り物を食べるべきだ。断じて食べるべきだ。

私は夢とみいの残り物の匂いをかぎ、腐っていないのを確かめると、やおら冷蔵

庫の中を覗き込んだ。そこには、最上段に、はんぺん、とりのささ身、銘柄別のかまぼこ、銘柄別のちくわ、かつおのなまり、魚肉ソーセージがみじん切りになってはいっている。一つ一つがラップに包んで置いてある。

いっておくが、私の食べ物ではない。バアさん猫の食べ物だ。姉やアシスタントのKさん、Iさんは、それらの中から、メニューが重ならないように選び出し、ラップのまま皿にのせ、ラップを開く。猫が来て、匂いをかぎ、横を向いたら、そのメニューは引っ込める。

かくして、猫の気に入ったメニューにぶつかるまで、同じ動作を繰り返す。

そんなことをするから、うちの猫はかくも贅沢になるのだ、と私は思っている。もともと猫の餌は、人間の残り飯にオカカをかけると決まっている。子どもたちの私の飼っていた猫は、みんなそれで猫生（人生ではないだろう）を全うして^{まっとう}いたではないか。たまに、私の牛乳の飲み残しをやった時の、彼らの幸福そうだったこと。いまの猫は粗食の幸福を、人間から奪われている。

冷蔵庫から、猫メニューの一つ、宇部のかまさしのみじん切りを掴み出した。夢とみいの残り猫缶を一つの皿に集める。その上にかまさしのみじん切りをぶちまけ、箸でかき混ぜた。皿にラップをかけ、レンジに入れて、四十秒。

チンと音がして、魚の煮える匂いがする。

少し冷めるのを待って、皿一枚を、台所の真ん中にでんと置いた。

（いちいち、二つも、同じ物を作れるか。私だって、忙しいんだ。一日中、猫の茶碗ばかり洗っていられるかってんだ。猫も、少しは人間の都合に合わせろ）

という心境だ。

すると、どうだろう。みい子が寄ってきた。寄ってきて、残り物の猫缶を、食べるではないか。

（ザマアミロ！）

私は機嫌がよくなる。猫が匂いで食い物を選ぶという話を、マイケル・W・フォックス博士の本で読んだことがある。レンジでチンをした残り物は、香ばしい匂いをたてていた。

まんまと残り物を食わされたみい子は、勝手口の柱で爪をとぎはじめた。

これをやると、まるでバネ仕掛のように、私が飛んでくるのを彼女は知っている。私は、猫に家をこわされるのがいやなのだ。みい子は、私の最もいやがることをすることによって、私に勝手口を開けると命令している。すでに、正面、サンルームの戸は開いている。出るなら、そこから出ればいい。というのは人間の理屈。猫に